

ソヴェト文化外交官 E. Γ. スパルヴィンの使命 —日本における言説実践とその背景 (1925-31 年) —

吉川 弘 晃

本稿は、戦間期のソ連が日本に対して行った文化宣伝のひとつの側面について、その主導的役割を担ったエヴゲーニー・スパルヴィンによる日本語での言説実践の分析を通じて明らかにするものである。ソ連は資本主義国との関係を再構築すべく、革命工作とは分離させて、より広い思想・階級の人々に影響を与える手段として対外文化宣伝を重視した。革命前から日本語を研究し、日本に幅広い人脈をもっていた東洋学者スパルヴィンは、文化宣伝組織 VOKS の駐日全権として東京に赴任し (1925-31 年)、日ソ間の様々な交流企画を組織するだけでなく、新聞や雑誌といった多種多様な日本語媒体で積極的に発信して「大使館の顔」として知られた。外国人評論家としての強烈な個性を武器に、現地の言論空間に介入する一方、そこに世界的規模で構想された VOKS の戦略を巧みに組み込んでいたことを彼の言説は示している。スパルヴィンという個人の才能に依拠したソ連の対日文化宣伝のあり方は、卓越した個人の交流から集団的な組織の政策へと「文化外交」なるものの形態が転換する時代を象徴していた。

はじめに

ロシア革命とソ連の社会実験は、国や言語、イデオロギーの左右を越え、世界各地で大きな関心と激しい議論を呼んだ。それを支えたのは、ソ連と各地域を結ぶ交通機関による人間の往来と各言語・各種媒体を通じた文物の交換であり、日本もその例外ではない。戦間期のソ連文化の受容にとって、コミンテルンや日本共産党による非合法活動は不可欠な背景をなすが、その都市生活への浸透——「マルクスボーイ」が路地を歩き、ブハーリンの『唯物史観』が書店に並び、検閲を突破したソ連映画がスクリーンを賑わす風景¹⁾——を支えたのは合法的な文化交渉であった²⁾。近年、1925 年の国交回復から 30 年代初めまでに日ソ間で展開されたヒト・モノ・情報の多様なやり取りに注目する研究が増えているが、その多くは受け手 (日本) 側の動向を個々のエピソードごとに扱っているにすぎない³⁾。だが、戦前期の日ソ文化交渉をひとつの歴史的事件として立体的に描くには、文化交渉の送り手 (ソ連側の文化宣伝の当事者たち) の実践を、同時代

の世界史的潮流を踏まえ、日本という場のなかで丹念に位置づけていく必要がある。

そこで本稿は、当該期の対日文化宣伝を指導したエヴゲーニー・スパルヴィン（Евгений Генрихович Спальвин, 1872-1933）の活動を取り上げる。スパルヴィンは帝政時代よりロシア随一の東洋学者・日本学者として知られ、国交回復後まもなく東京のソ連大使館に赴任し、3人の大使のもとで6年あまり、対日文化宣伝を担当した⁴⁾。彼は、それまでに培った日本での広範な人脈と高度な日本語能力を活かし、数多くのイベントを企画・開催したり、また新聞や雑誌に数多く寄稿したりすることで、いわば「大使館の顔」として日ソ文化交渉の黄金期を演出した。

ここで注目すべきは、戦間期にソ連が積極的に展開した対外文化宣伝である。20年代、世界同時革命が破綻するにつれて資本主義諸国の国交修復に転じたボリシェヴィキ政権は、その有効な手段として海外知識人との交流に注目していた。ソ連およびコミンテルンは、多種多様なジャンルや宣伝形態をもった組織を通じて、全世界のプロレタリア勢力からより多くの支持を得ようとする一方、特にブルジョワ層や共産主義に限らない幅広い思想をもった文化人を取り込む方策も用意していた。彼らへの工作を担ったのが、全ソ対外文化連絡協会 *Всесоюзное общество культурной связи с заграницей*、（以下 *VOKS* と称す）である。しかし、日本を含めた各国当局は、ソ連の文化交流を隠れ蓑にした革命煽動を恐れていた。そこで文化宣伝の担当者に求められたのは、「政治」と「文化」の平衡感覚を保ちながら、現地社会での警戒感を解き、より良いソ連像を醸成する柔軟な技術であった⁵⁾。

それでは、モスクワは *VOKS* 駐日全権スパルヴィンにいかなる使命を与えたのか。そして彼はその学術的才覚と政治的才覚をいかに連動させ、どの程度まで自らの仕事を達成できたのか。本稿はその手がかりとして彼が日本語圏の媒体で発信した言説を中心に、次のように検証する。まず、スパルヴィンの略歴と歴史的背景を確認し、対象テキストの批判を行った上で、まず彼がソ連側の窓口として日本社会に向けて語る主体をいかに立ち上げたか、次にいかに彼が言論実践を通じて自身を文化交渉の触媒となしたかという2つの問いに沿って、スパルヴィンと彼に関する言説を分析する。その際、重要な背景として、ロシア東洋学の状況とソ連の対外文化宣伝での「東方」の位置づけにも注意する。以上を通じて発信者側の視点から——ここ数年の時局による厳しい資料的制約を承知のうえで——日ソ文化交渉がもった歴史的意義を明らかにしたい⁶⁾。

1 日露・日ソ文化交渉史とスパルヴィン

スパルヴィンは、1872年、ラトヴィア人のジャーナリストの息子としてロシア帝国領内のリガ郊外に生を受けた⁷⁾。サンクト＝ペテルブルク大学東洋学部を卒業後、1年あまりの日本留学で長谷川辰之助（二葉亭四迷）たちとの交流を経て、1900年にウラジオストク東洋学院日本語科教授代行に就任する。その後、ロシア軍の対日防諜活動にも関わりながら、日露戦争前後に何度か日本に滞在し、そこで得た人脈を活かして日本語の研究・翻訳・教育に尽力している。第1次世界大戦当時、日露同盟と日本海での貿易の進展を背景に、ウラジオストクは日本人居留民の一大センターとなっていた。10月革命からロシア内戦の時代（1917-22年）、極東ロシアは赤軍・白衛軍・干涉軍（日本・合州国）の争いの舞台となるが、そうした混乱期にあってもスパルヴィンは日露両国民の橋渡し役として、また新たな東洋学の指導者として、人脈と研究基盤の維持と構築（交流団体の支援・学術雑誌の創刊）に尽力する。地域専門家としての能力を見込まれた彼は、ポリシェヴィキ政権のもとで改組された極東大学で教鞭を取り続けることを許された。日ソ基本（北京）条約の締結からまもない1925年4月、東京のソ連大使館に書記官として赴任する。同年8月に人民委員会議でVOKS設置が決議されると、同駐日代表を兼任して、文化宣伝を指導し、日ソ両国での多くの交流事業を企画・実施した⁸⁾。31年末、中国東方鉄道（КВЖД）顧問としてハルビンへ転任するが、2年後に同地で死去した。

スパルヴィンは日露・日ソ関係史で重要な人物であるにもかかわらず、以上の略歴が示すとおり、その活動があまりに多岐に渡っていることは（東洋学者・教育者・大学行政官・編集者・書誌学者・諜報員・外交官…）、かえって包括的研究の困難と不足を招いている。実際、20世紀に活躍したロシア・ソ連の日本学者であるエリセーエフ（Сергей Григорьевич Елисеев, 1889-1975）やコンラド（Николай Иосифович Конрад, 1891-1970）、ネフスキー（Николай Александрович Невский, 1892-1937）に比べるとスパルヴィンに関する研究は少ない⁹⁾。だが、今世紀に入ってディボフスキーたちによる基礎的・総合的な国際共同研究によってスパルヴィン研究は大きな一歩を踏み出した。自身の著作（記事・論文・教科書・文法書・辞書など）だけでなく、日露双方で集められた数々の資料にもとづく実証的な調査によって、スパルヴィンは「ロシア初の専門的な日本学者」の評価を得た¹⁰⁾。本論が対象とする日ソ文化交渉に関して言えば、日ソ両

方の外交文書を用いて外交官僚としての活動を検討した藤本和貴夫は、スパルヴィンは東京で対日文化宣伝を巧みに進めるが、モスクワのVOKS本部との葛藤・対立を抱え、組織内で孤立していき、やがて退任に追い込まれたと推測している¹¹⁾。

こうした先行研究が結ぶスパルヴィンの像は、一見すると集権的なモスクワの権力と自由な東洋学の研究のはざまで引き裂かれた悲運の知識人として形成されよう。それは、20年代に「インターナショナル」の理想で煌めき、日々の「モダニズム」を彩ったが、やがて担い手の政治的運命とともに露と消えるという、日ソ文化交渉のもつ悲劇的なイメージを象徴しているようにすら見える¹²⁾。とはいえ、大衆政治時代の到来により、内政だけでなく外交の分野でも言論空間（世論）の影響力が顕著に増す20世紀においては、科学的な知識（認識）がそれ自体として大きな影響力をもつこと、それゆえに知識に力を与える専門性の言説（実践）の次元での位置が問題になる。それを踏まえれば、ここで「政治と学問」、あるいは「権力者と知識人」という二項対立を議論の前提とするのは安易ではなからうか。

このように軍勢力や経済力とは異なる価値を通じて、相手国の世論を自国の都合のよいように動かす試みは近年、「文化外交 cultural diplomacy」（または「広報外交 public diplomacy」）として注目される。だが、この語はあまりに多くの場で濫用され、あまりに広い意味を帯びている現情に鑑みれば、歴史的事象の分析概念としてそのまま使うのは危険である。その概念的検討は別の機会を設けることにして、ここでは試みに次の3つの意味の方向（同じ対象のなかでこれらが重複することもありえる）をこの語に与えてみよう。(1) 文化・芸術に関する高度な知識・素養を備えた職業外交官（「文人」的な外交官）、(2) 国家の対外的文化政策を立案・実践する外交官僚（「文化外交」の官僚）、(3) 官民を問わず幅広く国際文化交流に携わる人々（広義の「文化外交官（人）」）が考えられよう。

VOKS時代のスパルヴィンは、日ソ外交の現場において、学術に優れた専門知識人でありながら、その学知を権力として行使していた。結論をやや先取りすれば、彼は以上の方向のうち、主に(1)として注目され、あるいは(3)との関わりのみで言及されてきたが、実際には彼の実践は(2)の方向をむしろ強く示している。とすれば、彼が当時、日本語媒体に残した言説は、ひとりの個性的な日本学者が残した思考の痕跡であると同時に、一個人を越えたソ連の対外文化政策の痕跡である以上、それぞれの次元と文脈のなかで丁寧に検討される必要がある。

その手がかりとして我々が重視したいのが、論集『横眼で見た日本』である。本書

は、スパルヴィンが日本研究をはじめて35周年を迎えたのを祝うべく（1930年10月27日に有志たちが祝賀会を開催）、ソ連大使館員・VOKS 駐日全権として彼が日本で書いたり話したりしたものを収集・再編集して、31年に新潮社から出版されたものである。本書の編纂には、ウラジオストク時代からの彼の仲間である大竹博吉や和泉良之助が協力しており、また刊行には日露協会会頭の貴族院議員・倉地鉄吉と駐日ソ連大使トロヤノフスキーが大きな支援を与えたという¹³⁾。全部で460頁以上の分量を誇る本書は、自伝・人物評論・旅行日記（および書簡）・エッセイ・日本語論・日露文化論・日露交渉論といった多彩なジャンルの文章を収録し、大竹の序文いわく「中にはスパルウキンさん自身の手で、日本語で書かれたものも非常に澤山ある」¹⁴⁾。

本論集はいわば、日ソ交渉の黄金期を映し出した貴重なドキュメントである一方、個々のテキストの出典事項がほぼ不完全な形でしか記されていないという史料上の欠落をもつ。いずれの先行研究もそれを埋める手続きを経ていないため、この論集を歴史資料として適切に利用できていない。例えば、ディボフスキーは『横眼で見た日本』の記述からスパルヴィンの日本論を見出そうとするが、テキストの初出情報を十分に検討していないため、個々の言説の深い分析には至っていない¹⁵⁾。また、藤本の研究は、公文書や新聞にもっぱら依拠しており、論集にはあまり立ち入った分析を加えていない¹⁶⁾。確かにVOKSという組織内の政策過程のなかでスパルヴィンの動向を考えるには公文書は不可欠であるが、彼が日本の世論に流した言葉に目を向けなければ、彼の「文化外交官」としての本領は見えないままである。

そこで我々はまず、論集『横眼で見た日本』に網羅的なテキスト批判を施した。収録テキストの初出情報（題目・媒体・出版年月）を可能な限りで特定し、その際にそれらが論集に収録されるときに修正・編集される過程も検証するとともに、スパルヴィンがVOKS時代に書いた記事のうち、論集に収録されなかったものも同様に調査した（論文末の【表1】と【表2】を参照）。さらに、彼の活動についての日本内外での関連する言説についても可能な限り収集した。こうした基礎作業を通じて初めて、スパルヴィンが「文化外交官」として、1925年からの6年間、多彩な媒体に向けて日本語で発信を続け、一定の存在感をメディアに示しつづけていたことが明らかとなった。

冒頭で述べたように、本論は、スパルヴィンが「文化外交官」（地域専門家にして外交官僚である人間）として残した言説を頼りに、ソ連の対日文化政策のあり方を探究するものであり、彼の伝記的記述ではない。そのため以下、日ソ文化交渉における個々の出来事や過程については必要最低限、言及するにとどめ、スパルヴィンの言説を可能な

限り、それぞれのもつ国内外の歴史的な文脈に位置づけ、全体の問題系に沿って読解する読解していく。

以上をまとめると、従来の研究はスパルヴィンが「何を」語ったかという問いに注意を向けてきた一方、彼が「どこで」語ることができたかという前提的な問いに取り組んでおらず、ゆえに彼が「いかに」語ったかという問いにも答えられていない。次節では、昭和初期の在日ソ連大使館の「顔」としての活動を可能にした条件について検討していこう。

2 スパルヴィンはどこに交渉の主体を立ちあげたか？

2.1 日本知識人とのネットワーク

スパルヴィンの人脈は、新潮社の雑誌『文学時代』（1931年10月号）に寄せた人物評「日本の人々を観る」からうかがえる。大学人・文学者から政治家・外交官・軍人・学術関係者に至るまで、個人的なエピソードを交えて語るこのエッセイは、全体として、書き手がひとりの日本学者として、体制・反体制の別にとらわれない幅広い人間関係をもっているという印象を与える（【表1:5】、27-33頁。※以下、本論で引用するスパルヴィンの日本語言説の出典は、文末掲載の表・記事の番号・頁数で示す。頁数は原則、初出媒体のものを示すが、論集『横眼で見た日本』論集にしか収録されていない記事は「論集〇頁」のように示す¹⁷⁾。ここでスパルヴィンが各人に与える論評は、彼自身のメディアでの実践を考える上で興味深い、ここでは書き手の人脈の一端を確認するにとどめ、2.3で詳しく述べる。

次に注目したいのがスパルヴィンと新潮社のつながりである。新潮社は論集『横眼で見た日本』の出版を引き受けた出版社であるが、それ以前から彼に何度も執筆する雑誌媒体を提供している（【表1:5, 24, 28, 37】を参照）。スパルヴィンが1920年代の出版界でプロレタリア文学に注力していた改造社ではなく、新潮社と手を結んだ理由は、まず露骨な政治性を表に出したくないVOKSの対外文化宣伝に都合が良いと考えたことにあるのだろうが、もうひとつに日本におけるロシア・ソ連文化受容の基盤作りを担う存在として新潮社に強い期待を示していたことにある。

スパルヴィンはVOKSが全世界向けに英語・フランス語・ドイツ語で配布していた機関紙『VOKS 週報 *Weekly News Bulletin (VOKS)*』に「日本のロシア文学への関心」という記事を発表した¹⁸⁾。これは新潮社が1927年3月に乗り出した『世界文学全集』

の出版企画に取材したもので、各 500 頁・全 38 巻（予定）のうち 8 巻がロシア文学に捧げられ、エレンブルクなどといった新たなソビエト文学も収録される予定だと伝えている¹⁹⁾。そして「新版全集の画期的な特徴は、全巻がロシア語から直接、新しく翻訳されるということである。よってトルストイの『復活 Resurrection』は初めてロシア語から訳される」として、この翻訳事業は、歴史的な意義を与えられ、日ソ両国の共感と理解の上に大きくなりつつある努力のたまものとして称賛されている²⁰⁾。

もちろん、この記事が実質的には新潮社の宣伝広告であり、この「記事 Notes」が新潮社の求めによって書かれたことは、記事欄外にある解題からもわかる。しかし、執筆者のスバルヴィンは『『世界文学選集 Collected Edition of Universal Literature』に参与している」とあるように、この記事の出版それ自体が（執筆背景も含めて）、スバルヴィンと新潮社が実際的な関係をもっていたことを示している。

出版社が国際文化交流のアクターとして機能したことは同時代的な背景をもつ。20 世紀はじめ、古今東西のカノンをシリーズものとして刊行するモデルは、イギリスの「エヴリマンズ・ライブラリー」や合州国の「ハーヴァード・クラシックス」からはじまり、日本でも大正期の出版ブームを背景に複数の出版社が『世界文学全集』を競って売り出したように、世界的な潮流であった²¹⁾。なかでも新潮社の円本版『世界文学全集』は商業的な成功を収めただけでなく、翻訳者に多額の印税をもたらし、数多くの文学者が貴重な生活手段を得ていく契機となったという点でも文化史的な意義をもつ²²⁾。日仏交流でも新潮社は期待を寄せられ、1923 年、「詩人外交官」として知られる駐日大使ポール・クロードル（Paul Claudel, 1868-1955）は自らの仏文詩集を出版しようとする際、日本外務省は彼に新潮社を紹介したという²³⁾。

このようにスバルヴィンは、個人のレベルと組織のレベルで、対日宣伝を展開するためのネットワークを形成していった²⁴⁾。では、彼はいかにして「文化外交官」として語る主体を、日本語媒体のなかに作りあげていったのであろうか。

2.2 東洋学者としての「わたし」

スバルヴィンは、日本における「VOKS の顔」として合法的かつ特権的に振る舞うことのできるように、言説実践でのさまざまな「差異化」を通じて語る主体を形成していった。その特徴を端的に表せば、非政治的かつ国際的な東洋学者としての「わたし」である。

スバルヴィンが心がけていたのはまず、自らを政治活動家（コミンテルンや日本共産

党の関係者)とはっきり区別することである。例えば、1929年7月に『文藝春秋』に寄せた記事「日本とわたし」でスパルヴィンは、自分が学問一筋に生きてきたこと、日本語学の研究がいかに困難であるか、そして極東ロシアの学術機関に25年奉職してきたことに触れる。そして「ロシア人として日本語を研究し、而して日露交渉関係の多い巷に身をおく以上は、今後ともかうした境遇に処さねばならぬものと覚悟して居ります。併し私はどこまでも學究として終始一貫してゐる積りでありますから、この点だけは大いに諒解して貰はねばならぬのです」と述べ、多くの読み手に対し、自身の「非政治性」を自らの経歴を語ることで訴えている（【表1: 1】、13-14頁）。

この記事がもとは同年春、東京で開かれた国際会議「汎太平洋倶楽部」での講演であるため、スパルヴィンが自らの立場性により細心の注意を払っていたことは容易に推測できよう²⁵⁾。また、繰り返すようにVOKSは、左翼以外を含めた幅広い層に対する影響力行使を期待されたため、また、ソ連大使館での「政治宣伝」は条約上、禁止されていたため、(実態はさておき)コミンテルンや各国共産党との連絡は避ける方針を取っていた²⁶⁾。彼もまたひとりの外交官僚としてこれに従っているのである。

スパルヴィンはまた、欧米の東洋学者よりも、より高度な研究水準にもとづいて日本を語ることのできる人物であると自らを規定している。例えば、「日本とわたし」の別の箇所では、ソ連での日本文化の紹介に果たした自らの役割を誇りつつ、「欧米人中にも日本を研究して日本を紹介するものがないではありませんが、併し支那語蒙古語満洲語及朝鮮語等を基礎として日本語を研究し、而してのちに日本を紹介するものは至つて少ない様です」と述べる（【表1: 1】、12頁）。これは、中国語を学んでから東アジアの諸言語を習得するというロシア東洋学の伝統にスパルヴィンも服することを示すが、我々のより大きな注意を引くのは欧米の東洋研究に対する彼の批判的な態度である²⁷⁾。

スパルヴィンが批判するのは、欧米の著名な日本学者たちが自らにとって、もはや失われてしまった「古き良き日本」にばかり注目し、近代化していく日本に関する問題をあまり真剣に扱わない点である。東京帝大では多くの教え子をもち、20年代後半には全集が刊行されて日本国内でも親しまれていた小泉八雲(Lafcadio Hearn, 1850-1904)でさえ、その書籍は「二十世紀の外国人の為には日本学のアヘンであると言はなければなりません」と一刀両断されている（【表1: 21】、論集235頁）²⁸⁾。スパルヴィンは西洋人の東洋世界への理解の浅薄さを批判し、「新しい日本」への共感を強調するあまり、「日本国民の偉大さは、同時にそして同一の段階に於て、自分達に特有な東洋と、自分達には他人である西欧とに対して興味を持ち得る、と云ふ点に存するのだ」といった、

同時代の日本で流行していた「東西文明論」のような言説さえ見せるのは興味深い（【表 1: 7】、82 頁）²⁹。だが、スパルヴィンの自己規定に的を絞るべく、ここではさらなる検討は避け、ソ連および VOKS の戦略における「東洋（学）」の位置づけは 3.1 で扱うことにする。

さらに特筆すべきは、スパルヴィンがロシア・ソ連東洋学に対しても自分の特異性を主張していることである。彼のソ連本国の東洋学者たちに対する見解は、上述した欧米の日本学界に対するものと部分的に共通するが、彼らは旧来的な文献学的なスタイルに固執するので、それ以外の分野や同時代の日本についての研究ができていないというものである。例えば、東京着任まもなく民間の対ソ交流団体「日露芸術協会」で行われた講演において、文献学では捉えられない新たな課題（経済・社会問題）が浮上しているにもかかわらず、「東洋学者は、神官の如く先輩より継承した経典を墨守するのみで、其大多数の者は過去の陰影を追ふに留まり、彼等が墳墓を発掘する傍には、実生活を営む住民の群ある事に気附かなかつた」と、本国の東洋学界の保守性が厳しい調子で批判される（【表 1: 2】、18-19 頁）。

学術史的な背景についていえば、18 世紀以来、ロシアの東洋学 *востоковедение* は文献学を重視するサンクト＝ペテルブルク大学を中心に発展したが、19 世紀末からの満洲への進出を背景に、ヴィツテ（Сергей Юльевич Витте, 1849-1915）たちが実務的な課題に応じるための拠点として「東洋学院 *Восточный институт*」（ウラジオストク）や「帝立東洋学会 *Императорское общество востоковедения*」を設立する。ペテルブルクで教育を受けたものの、その能力を期待されて新しい機関に引き抜かれた者のひとりが、他ならぬスパルヴィンであった³⁰。

だが、東洋学界と自らの対立をことさらに強調するのは、実際には彼が「文化外交官」としてある種、学術機関に属する研究者には歓迎されないような媒体で、幅広い階層に言葉を届ける必要があったからではないか。駐日ソ連大使館を離れる前、「日本語研究三十五周年祝賀会」の答辞で、スパルヴィンはソ連の外交関係者と日本の対ソ交流関係者を前に、「斯う云ふ協会の仕事も或る意見の狭い東洋研究者の方から反対運動に会いました。あまり社会の広い階級に新聞紙を経て記事を出したり講演をやつたりするとその東洋学の精神が侮辱される様になると色々非難した人もありました」と、専門家でありながらある種、「ジャーナリストイック」に振る舞う難しさを語っている（【表 1: 2】、38 頁）。

このようにスパルヴィンは、党派的立場と距離をおき、かつ学術制度の束縛にも囚わ

れない自分こそが、日本の「生きた姿」を捉え、これと交渉するに耐える人物であることを繰り返し説いた。では、大正期日本の出版バブルがもたらした大量生産・大量消費の「ジャーナリズム」において、彼は人々の関心を引くために、いかなるスタイルを用いたのか。

2.3 大衆メディアにおける実践

文化宣伝に携わる東洋学者としてスパルヴィンは「極く普通の新聞の記事でも大きな博士論文よりも東洋学の利益がはひつてゐると思ひます」と豪語する（【表 1: 2】、38頁）。その日本語の文章は、いずれも深い教養と専門的知識によりつつも、しばしば諧謔を含み、決して毒舌を憚らないことで、独自の文体とリズムを備えたものになっている。

そうした特徴を如実に示すのは、まず彼の人物評論においてである。2.1でも取り上げた記事「日本の人々を観る」（1931年10月）で、スパルヴィンは自らの幅広い人脈だけでなく、自らのメディアでの立場を展開している。彼の人物評価はほぼ一貫してロシア・ソ連に対する学問的な知見の深さに基づいており、体制側の人物（外交官・軍人）でも語学力や専門知識があれば高く評価する一方、左翼側でも浅い理解やイデオロギー的理由だけでソ連を礼賛する人物には批判を加えている。例えば、民間発の日ソ文化交渉の立役者として知られた文学者の秋田雨雀でさえ、「ソヴェトの事情を解釈しようと努力してゐますが、秋田さんは学者でないから基礎知識がない、基礎知識がないから説明ができない。唯だよいとか悪いとか云ふだけでは不徹底です。それを説明する武器を持たないで、ただ褒めてばかりゐたのでは、却つて妙な感情を與へるでせう」と一刀両断される（【表 1: 5】、28頁³¹⁾。公共の媒体で最大の味方に毒舌を与えるスパルヴィンの真意が、左翼と距離を取るポーズを示すことにあったのか、気兼ねなくものを言える身内との親密さを示すことにあったのかは不明である。ただ、彼は自分だけが外国人の立場から、ソ連に関わる日本人の優劣を判定できる専門家であると主張しているのは明らかである。

スパルヴィンの鋭い毒舌ならぬ毒筆が、駐在先の時の権力者へ向かうとき、その文章は次のようにジャーナリスティックな意味合いを帯びる。

百葉の長を愛づる若槻首相に、友人が禁酒を進めたさうですが、禁酒の代りに、なぜ毎日小説を読むこと、芝居を見ること、音楽を聴くこと、等々を進めないのです

う【中略】若槻氏は自分で文學を知らないことを誇りにしてゐます。総じて日本の政治家達（学者も同様ですが）は、その専門のことだけしか知らない。人間生活の基礎になる文學、芸術、哲学といふやうなものには一向に無関心のやうです。従つて国民生活の実用に触れないし、時代精神を正しく理解することもできないのです。この点で欧米の政治家や外交官は大へん異つてゐると思ひます【中略】日本の大進歩は、さういふ、少数の指導者が作つたのではなくて、多数の一般国民の進歩的な精神から作り出されたものです【中略・下線は引用者による】。（【表 1: 5】， 32-33 頁）

この調子で伊藤博文や山縣有朋、大隈重信といった政治家や、徳富蘇峰や野間清治といった言論人が批判されている。イデオロギーや政策論ではなく、身近な言動や人のあり方の点で、指導者層を厳しく批判し、庶民を擁護するというスバルヴィンの語りの手法は、いわば通俗的なそれであり、想定される一般読者の欲望に応じようとするものであった。

それを顕著に表しているのは、スバルヴィンが恋愛や性風俗、つまり昭和初期に「エロ」と称された話題を好んで取り上げていることである。彼は 1930 年夏、妻との大阪旅行のかたわら、道頓堀のカフェーやキャバレーでの体験を以下のように記している。

エロティシズムは大阪の企業家によつて、両性の範囲から国際の範囲にまで移された。少くとも昨日は、日章旗とソヴェトの旗（星と槌と鎌）の下に働く所の「日露エロ美人」の名をもつて、「日露合同パレー團」のピラが町中に播布された【引用者注：中略】私はエロティシズムはまだまだ十分に発達の余地があると思ふ。例へば、エロ・アイスクリームといふ名の下に、立派なエロ・デザートとして、キッスを実体化することも出来よう。あとの勘定のことを思へば冷気を催ほすこと請合ひである。（【表 1: 11】， 118-119 頁）

この記述は 20 年代末からの「エロ・グロ・ナンセンス」時代の最盛期の、それも「カフェー」の性風俗業化の流れを作ったという大阪の盛り場の雰囲気³²⁾を、著者特有のこなれた諧謔で締められている。こうした言説を、大正期から高まる婦人解放と自由恋愛の流れ、大衆文化でのジェンダー的秩序の動揺といった流れに位置づけるのは無論、容易である。彼は、保守的な女性像のために「日本婦人が非活動的な袖や裾に煩は

され、非衛生的な幅廣の帯で以て束縛されねばならぬ筈はない」と述べ（【表 1: 22】、論集 248-249 頁）、日本を去る間際の東京朝日新聞のインタビューでは日本社会での婦人の地位の低さを改善するよう語っている（【表 2: 49】）。

しかし、彼の「エロ」言説が置かれた場をより細かく観察すると、いかにスパルヴィンが日本語媒体で多くの読者に存在感を示そうと苦心したかが分かる。1931年9月に発表した「エロを解剖する」は、宗教・政治・漢字・女性・メディアなど様々な視点から日本と世界における「エロティシズム」を論じ、日本社会の性道徳を以下のような調子で生々しく描き、風刺したエッセイである。

新聞や雑誌を真面目に読んでみると、日本が何で一番悩んでゐるのか、すぐわかる。それは他でもない。日本の男女は驚くべきほどエロの悩みをもつてゐる【引用者注：中略】日本の広告を見ると、日本の男性の悩みは、まるで日本の女性の強い要求によるものらしい。「三回！ 五回！ 何度結婚しても妻に去られた青年の秘密悶絶、その原因は……。金よりも完全なる男性を……。止むを得ぬ晩婚と不自然行為、生殖器の不健全は……。早老する勿れ、人生を左右する〇〇器の強弱……」等々、〇〇がはひつたりはひらなかつたりまるで新しい日本語の手本のやうだ。この広告を見ると、日本の男性は女性を怖がつてゐるらしい。強大に發育せしめ、とか、五十代の人も三十代に若返るとか、かういふ薬の助力によつて、日本の男性は女性に勝たうとしてゐる。そして皆強くなつてしまへば広告が出なくなつて新聞は困だらうと思ふが、その時は反対に弱くなる薬の広告で満たされる違ひない。要するに、エロは永久に新聞の財源であり、国家の基礎である。（【表 1: 28】、41、43-44 頁）

スパルヴィンの論説の背景として、カフェー規制をめぐる論争に触れておこう。1929年に警視総監に就任した丸山鶴吉は、風紀紊乱への対策としてカフェーの営業時間を深夜0時まで短縮した。その2年後、詩人のサトウハチローは、かえって店外での売春活動を誘発するとして「警視総監に与ふる書」を寄稿して丸山を批判、対して丸山は「佐藤八郎君に御返しする書」で反論した³³⁾。この論争の舞台こそが新潮社の『文学時代』であり、同じ媒体に掲載されたスパルヴィンの論説はサトウ・丸山を意識していたのである。

当時の都市文化の象徴でもあったカフェーと性を扱った伏字混じりのエッセイは、果

たして大衆の好奇心を集めた。スバルヴィンは『讀賣新聞』に寄せた後日談で、「エロを解剖する」を掲載した新潮社は内務省から「ひどいお小言を食った」、日本人の妻は論文の内容から雑誌が発禁になるだろうと予想した、その後に大勢の検閲官に暴力を振るわれる悪夢を見た、けれども東京・大阪・北海道から励ましの手紙をもらって安心したとユーモアを交えて語っている（【表 2: 48】）。

また、スバルヴィンの記事が、文学者・正宗白鳥の関心を得たことも注目値する。白鳥は、総合雑誌における「エロ」言説の氾濫にうんざりしており、「お調子に乗つて、汚らしい話を喋舌り立てる人を見ると、あさましい気がしないでもない」と述べる一方、スバルヴィンは「風豊は怪異だが、案外好人物らしく思われる同氏の隔意なきエロ話は、滑稽味があつて面白い。その中でも、「性的煩悶と新聞広告」なんか、観察が凡でない」「スバルウキン氏の日本通には、をりをりくすぐつたい感じがする」と高く評価している³⁴⁾。

さらに、日本語媒体で自らに親しみをもってもらうべく、スバルヴィンは『横眼で見た日本』に多くの風刺画を挿入している点も興味深い。漫画を書いたのは、彼のもとで日本語を学んだ東洋学者レイフェルト（Андрей Алексеевич Лейферт, 1898-1937）だという³⁵⁾。風刺画は、皮肉やユーモア豊かなスバルヴィンの文体に彩りを与えるだけでなく、彼の風貌をより多くの人々に親しみをもって伝えるのに適したメディア装置である³⁶⁾。



以上で論じてきたように、スバルヴィンは日本の外交関係者や記者、知識人に対する講演、彼らとの会話、そして各媒体での発信により、積極的な言説実践を展開したが、それらはロシア・ソ連内外の東洋学での位置取り、日本の言論状況への十分な把握にもとづく戦略的なものであった。こうして彼は新潮社編集部「風刺諧諷に満ちてゐるが、流暢な日本語の会談中に飛び出す物凄い洒落た皮肉に至つては、到底日本人も遠く

及ばない」と評された（【表1: 28】，34頁）。言うなれば，高度な語学力と深い見識をもった「齒に衣着せぬ外国人評論家」として，日本語の言論空間で独自の位置を手にしたといえる。無論，この種の強烈なキャラクターは，20世紀のジャーナリズムでは繰り返し消費される商品に過ぎず，財政・制度的な保障が失われた瞬間，消え去る運命にある。だが，ロシア語にアクセスできる日本人が，英・独・仏・中のそれに比べて圧倒的に少ない当時，日本語で自由自在に発信・交渉できるスパルヴィンの個性は，新生ソヴェトの対外文化政策にとって欠かせない起動装置として働いたのではないか³⁷⁾。こうして立ち上がった交渉の主体は，いかなる本国の理念を背負い，実際の日ソ文化交流の場でそれを展開したのだろうか。

3 スパルヴィンはいかに交渉の触媒となりえたのか？

3.1 VOKSの「文化」観とスパルヴィンの「日本」観

スパルヴィンの「文化外交官」としての役割を考えるべく，その日本観を見ておこう。2.2で論じたように彼は古い日本に愛着を示しつつも，近代化する日本を擁護している。

日本に八年以上もゐたゾルフ大使は，ドイツに帰つてから，ある演説の中で次のやうに云つた。「日本人はヨーロッパの物質文化を非常に多く学んだ。我々も日本に於いてそれに劣らぬほどの精神文化を学ぶことが出来るが，それを学ぶのは誰だらう？」この言い表はし方は観念に於いては全く正しいが，その表現に於いてはかなり大きな修正を要する【中略】もしゾルフ氏が最初の部分で日本の物質文化達成の段階を指摘したならば，文化といふものを物質と精神との二つに分けるやうな古い偏見に囚はれなかつたであらう。我々は日本の文化が非常に高い程度に達してゐることを知つてゐる。ソヴェト連邦は日本人のもとで鉄道事業を学んで居り，アメリカさへ日本人を招聘した【中略・下線は引用者による】。（【表1: 22】，論集242頁）

ゾルフの祖国では「文化 Kultur」（民族的な習俗・伝統）と「文明 civilization」（普遍的な技術・制度）とに対立させ，前者を擁護する思考が流行していたが，これに対してスパルヴィンは，日本社会の工業化を伝統喪失として嘆かずに，先進的な技術や制度面での社会改革として，つまり「文化」の発達として理解する。とすれば，彼や VOKS 関

係者は19世紀の西欧知識人と同様、物質面での達成を「文化＝文明」だと捉えたのか。

結論から言えば、話はそれほど単純ではない。1920年代のVOKS幹部は、西洋先進国の「進歩」から多くを学ぼうという志向をもっていた。そもそもレーニンやトロツキーが合州国の「テイラー・システム」を、ソ連経済の模範として仰いだのは有名である。なるほど、VOKSのソ連国内向けの機関紙『西方と東方 *Запад и восток*』（1926年）の序文は、ロシアの知識人は「西方 *Запад*」の文化には明るいが、「東方 *Восток*」（日本や中国、モンゴルからペルシア、トルコをも含む）の文化の多様性をもっと学ぶべし、「文化交流の分野においては我々は今後、「東方を向け *Лицом к Востоку*」との標語を強調せねばならない」と宣言している。だがその反面³⁸、VOKS会長としてそう述べたカーメネヴァ（*Ольга Давыдовна Каменева*, 1883-1941）自身は、実際にはドイツやフランス、イギリス、合州国との交流事業を優先させ、VOKSの人員や予算の多くを「西方」へとつぎ込む政策を取っていた³⁹。

けれども、一方でソ連は「西方」とは違った独自の「文化」モデルの構築を強調していた点に注意しよう。VOKSが掲げる「文化」とは、少なくとも発足時の理念においては、社会物質・精神の両面での充実を指していた。外務人民委員部の幹部ロートシテイン（*Фёдор Аронович Ротштейн*, 1871-1953）は、『西方と東方』の論文において、欧米で達成されたという物質的・表面的な豊かさである「文化 *культура*」に、それとは別の「文明標準 *культуристичность*」を対置させ、「真の文明標準とは、外面的ではなく内面的な、物質的ではなく道徳・知的な獲得物であり、「人々の相互関係のなかで、人々のお互いの交流の品行や性質のなかで顕れる」と論じる。この観点では、物質的には豊かなテネシーの人々が、古い偉大な伝説を背景に機知と比喻をもって豊かな会話をするニーシャープールの人々よりも必ずしも高度であるとは言えない。非民主的で不十分な「文明標準」である「ジェントルマン精神」に対し、「我々の民族は、過去の反文化的な遺産 *антикультурное наследие* を根絶するだけでなく、文化と文明標準の本当の核心 *подлинная сущность* を組成するような、真に調和の取れた共存の勘と本能を獲得する」のだという⁴⁰。

では新たな「文明標準」の建設を他ならぬソ連が引き受ける歴史的根拠はどこにあるのか。世界的な東洋学者として知られたオルデンプルク（*Сергей Фёдорович Ольденбург*, 1863-1934）は、同じく『西方と東方』の論文で、東西文化の矛盾の拡大を背景に、ロシア革命が「西方」と「東方」のはざままで生じたことを強調し、「東方に卓越するというヨーロッパ人の偏見から我々は自由であり、そこに我々のとてつもない力

があるのだ」と論じる。そして東西文化をさせるという歴史的使命をソ連に付与し、そのために東洋学者は何をなすべきかを説いた⁴¹⁾。つまり、当時、国力の面では欧米諸国に敵わなかったソ連にとって、自らの打ち出す「進歩」の強みは道徳・精神性の優位にあり、その根拠は非欧米地域との積極的な文化交流を打ち出すことにある⁴²⁾。これこそがスパルヴィンの受けた使命の土台であると想定できる。

かかる背景を考えれば、VOKSの対「東方」文化政策、そのなかで20年代に最も力が注がれた日本への政策のもつ意義は明らかだろう。では、スパルヴィンは自らの役割を文化宣伝の現場でどのように果たしたのか。

3.2 文化宣伝の現場における実践

スパルヴィンは日本学に通じた知識人である一方、冒頭で述べたように、自らの専門的学知を権力として行使する「文化外交官」として、ソ連政府の意図を現地に伝え、国益を最大化することを期待された。

その分かりやすい事例は、通商関係者の読む媒体に向けて発表された記事「正しき産業奨励政策」（1930年7月）である。当時、ソ連は第一次五カ年計画（1928-32）の途上で、スターリンのもとで重工業化と農村集団化を軸とした党主導の計画経済（ゴスプラン）を進めていた。スパルヴィンはその効果と正当性を説きつつ、「国内生活が計画化されてる以上、外国との関係もまた輸出及び輸入といふ意味に於いて計画化されねばならない」として国際経済における日ソ提携を提案している（【表2: 46】、42頁）。しばしば指摘されるように、当時のソ連の対外宣伝は国内経済の発展を強調していたが、書き手はさらに将来、ソ連国民の購買力が伸びることを見越して、日本の優れた製品や技術（茶や鉄道技術）を輸出するよう勧めている（【表2: 46】、42頁）。イデオロギー色を抑え、巧みなリップサービスと相手側の実利を踏まえた提言は、至って月並みな「外交的談話」である。

だが、スパルヴィン個人の振る舞いを捉えるには、これまで扱ってきたような独白形式の言説だけでは不十分である。なぜなら文化外交の現場は、発信者から受信者への一方向的な伝達ではなく、しばしば大小の齟齬を含みながら形成される多方向的な形式をもった交渉によって形作られるからである。

我々には幸いにも、その希少な痕跡として、日ソ双方の文化（外交）関係者が集った座談会の記録「日露芸術家の会談記」が残されている（【表1: 37】）。1927年春、日本初の本格的なロシア美術展覧会である「新露西亜展」が開催され、日ソ文化交流が本格

的な盛り上がりを見せたのを機に、新潮社の編集者であり批評家の中村武羅夫（1886-1949）は、日ソ両国の芸術関係者とソ連大使館メンバーを集め、座談会を開催した。その論点は多岐に渡るが、全体の流れは、日本側参加者の質問に応じて、ソ連側が自国での芸術政策とその状況・展望を説明していくというものであった。

ここで参加者全体の役割を確認しておこう。ソ連側は、ドヴガレフスキー大使が政府の公式見解を大まかに述べ、文学・絵画・演劇の各論点についてはアルキン（Давид Ефимович Аркин, 1899-1957）、プーニン（Николай Николаевич Пунин, 1888-1953）、ガウズネル（Григорий Осипович Гаузнер, 1906-1934）といった批評家に対応する。対して日本側は、中村が進行を務め、廣津和郎や小山内薫といった文学者、昇曙夢や米川正夫といったロシア文学者が相手側に質問をする。最も重要な点は、この座談会が2つの言語で行われたことである。ソ連渡航歴のある蔵原惟人が通訳の役割に徹したのに対し（米川も担当）、スバルヴィンは、ソ連側の意図をロシア語で汲み取る一方、全ての発言を日本語で数多くこなすことで、（また弟子で大使館秘書のテルノフスカヤを補佐役として）「国際座談会」という場を積極的に制御していることに注意したい⁴³⁾。

座談会で掲げられた論題のひとつが「革命前の作家及び作品をいかに観るか」である。すなわち新生ソヴェトは、プロレタリア革命後の新たな芸術的達成を喧伝しつつも、対外宣伝の場で同時に求められたのは、それらを帝政期からのロシア文学の伝統と関係づけて行うことであった。こと日本においては、ロシアやソ連への共感はトルストイやトゥルゲーネフ、ドストエフスキーといった古典作品の受容に基づいていたからである。ここではその極めて複雑で議論が分かれる実態には立ち入らず、かなり大まかな整理をすれば、1920年代半ばのソ連本国の芸術状況は、それまでの伝統破壊・美学性優位を志向する多元的な潮流から、政治性優位（党主導）・形式的画一化を志向する一元的な潮流（34年の「社会主義リアリズム」の制定へ）へと移行しつつあった。すなわち、文学であれ演劇であれ、伝統的な形式に愛着のある観衆に対応すべく、19世紀的なリアリズム美学との接続性が（いずれ超克すべきと考えられるにせよ）意識されるようになっていた⁴⁴⁾。

こうした浮動的な本国の情勢に対し、ソ連側参加者たちの態度は少しずつ異なってもおかしくないが、少なくともドヴガレフスキーは「われわれは過去からわれわれに遺されたところの芸術的遺産を最も高く評価する」という大きな公式見解を示している（【表 1: 37】、2頁）。これに対して米川は、高度な宗教性をもったトルストイやドストエフスキーを評価しながら、反宗教運動（正教会への弾圧）を進めるソ連政府に矛盾は

ないかと問うのに対し、スパルヴィンは「トルストイはまだ生きてゐた時にアノ教会から追出されました【引用者注：正教会から破門されたこと】…それから私の考から、米川さんの指したヂレンマは、大したヂレンマでもないのです。小説読んで見ますと、小説の中で一般の生活について沢山書いてあります…その習慣を描くことは宗教の教へになりません」と答えることで（【表1: 37】、5-6頁）、ロシア文化の核であるはずの宗教文化の継承／断絶に話題が及ぶことをその場しのぎではあるが、巧みに回避している。

しかし、実はもうひとり、やや異様な位置を占める参加者として、芸術家のブブノワ（Варвара Дмитриевна Бубнова, 1886-1983）が登場する⁴⁵⁾。1910年代にロシア前衛派の一員として活動し、22年に母とともにロシアを離れ、日本で村山知義たちの前衛芸術集団「MAVO」に参加していた彼女は、かなり単純化すれば、それ以外のソ連側代表とは異なる美学至上（反伝統）主義の立場を取っていたと考えられる。実際に「ロシアの革命前とそれ以後の文学とは、私の考へるところでは、その遺産を承継いだといふよりも、その間の差異の方が非常に大きいと思ひます【引用者注：中略】トルストイやドストイエフスキイの方を眺めてゐる人は、古い文学に後退りをしようといふ人達であつて、新しい文学を建設しようとする人だちではない」と発言している。ここですかさず、昇曙夢が彼女に対し、「いまのごく最近のソヴィエト文学は、むしろ革命当時のフトウリズムとか、或はシムボリズムとかいふ様式から離れて、もつと前の、むしろ、トルストイとかドストイエフスキイとかいふやうな、あゝいふ写実主義の伝統に向かつて来てゐるやうに私は考へて居ります」（【表1: 37】、5頁）と反論する。スパルヴィン（とドヴガレフスキー）はこの機を逃さず、昇の意見（革命前との継続）に同意を表明して、ブブノワの認識（革命後の断絶）を封じこめている。

以上は座談会的一幕に過ぎないが、そこから垣間見えるのは、スパルヴィンはソ連政府（ドヴガレフスキー大使）の方針や意図を受け止めつつも、それらを日本側代表に、ひいては活字化された座談会を楽しむ日本の読者大衆に、スムーズに理解してもらうよう、戦略的に議論を進めていることである。すでに述べたように、非共産主義者を含む幅広い層を対象にするため、帝政期の文化的遺産を有効に活用する VOKS の方針を反映しているのか、彼は日本人の関心に合わせて19世紀ロシア文化の論点を掘り下げつつ、ブブノワのような革命的な立場を「語り」から排除しようとしている。こうした「文化外交官」としての仕事をスパルヴィンに可能にしたのは、彼のもつ豊かな専門知識と人的資本に加え、日本の言論界への目配りに加え、そこに介入する巧みな方法であったのである⁴⁶⁾。

3.3 「文化外交官」の退場と忘却？

1931年10月22日夕方、大阪ビルヂング地下のレインボーグリルでの送別会で、スバルヴィンは多数の人士に見送られて日本を去る。それからほぼ2年後、彼の死亡を伝える『讀賣新聞』の小さな記事には、「わが国でも珍しい人気者」、「『横眼で見た日本』は余りにも有名」とある⁴⁷⁾。33年12月15日午後6時より、東京のソ連大使館での追悼会に出席した秋田雨雀は、「いい、静かな、しめやかな会だった」と記している⁴⁸⁾。突如として姿を消したソ連大使館の顔は、日本の言説空間でいかなる運命をたどったのか。

それを示す痕跡は決して多くはない。スバルヴィンはまず、2.3で論じたように、毒舌の外国人評論家として、エロ・グロ・ナンセンスの風潮を外から言語化してくれる存在として認知されていたと思われる。例えば、作家の平林たい子は1937年の記事で、スバルヴィンによる日本の性文化論を引き、日本人男性が性的に豪放であるかのように見えてその実、衛生意識が低いとして、「その背後にある封建的な性的頹廢」を批判し、中国大陸での兵士の風紀紊乱を危惧している⁴⁹⁾。一方、スバルヴィンが帰国して数年が経つと、彼のジャーナリスト性は後退し、日本の伝統を外から評価してくれる東洋学者としてイメージされていく。例えば、東京高等師範学校で当時、教鞭を取っていた教育学者の佐々木秀一（1874-1945）は、桂離宮を評価した建築家ブルーノ・タウトと並べて、スバルヴィンの論集を「我等日本人の燈台本暗しの数々の部面を鋭く観察し、深く考へた判断を、四六判四六〇ページに満載して居る」と評している⁵⁰⁾。

もっとも、彼の名が通じたのは一部のソ連（ロシア）関係者に限定されていたことは否めない。当時、保険業者として働いていた阿部芳治は、1932年の書評において、著者とのウラジオストクでの交流を懐古しつつ、論集を「中間読物」として絶好の随筆的感想」としても日本研究書としても高く評価する一方、大手出版社（新潮社）が刊行した安価な本にしては世に知られていないことを惜しんでおり、その理由を「博士其人が、むろん一部には熟知なのに拘らず、一般と接触が絶えてゐるためであらう」と推測している⁵¹⁾。

スバルヴィン退場後も在日ソ連大使館での交流自体は1945年8月の対日開戦まで続くが、30年代後半にはスターリンによる党＝国家の強化とともにVOKSは自律性を失い、やがて混乱期に入り、日本でも対ソ文化交流団体が弾圧されていった。かつての日ソ文化交渉の象徴がいかに忘却（記憶）されたかは現時点では知りようもないが、少なくとも彼の表象と言説が日本語空間において瞬時に消費されてしまったのは間違いな

い。

お わ り に

議論を総括しよう。戦間期ソ連の対日文化政策を支えたのは、スパルヴィンという傑出した才能とそのスタンドプレーである。彼は20年代までに日本の各界で蓄えた経験と人的資本をもとに、専門的見地と外国人の視点から日本を饒舌に語る能力だけでなく、そうした言説実践においてソ連本国（VOKS）からの使命を効果的に遂行できる、強烈な個性を巧みに発揮する能力をあわせもっていた。それはまさしく、地域研究者の学知を外交官僚の権力へと統合し、現地のメディア空間に向けて現地の言語を行使する「文人的官僚 intellectual bureaucrat」としての「(文化) 外交官」であると言えよう。

20世紀前半、各国の対外政策で大衆政治の影響が強まる時代、こうした個性が文化交渉で目立つのは、上に述べたクローデル（仏）やゾルフ（独）のように、日ソ間に限った話ではない。だが一方、それまで続いてきた国家間の文化交渉の軸は、卓越した個性同士によるスタンドプレーから、国家機構のシステムに基づく文化宣伝の政策決定へと移行していた。当時、欧米諸国や中国に比べて日本の公的支援を受けにくいソ連とのやりとりは、民間の個人による非公式ルートにより頼らざるをえず、そうした傾向は明治期以来の対露文化交渉がもつ「非政府」的伝統でもあった⁵²⁾。欧米諸語や中国語に比べてロシア語にアクセスできる人が少なかったことも、この伝統を閉じた方向へと至らせる結果となる。とすれば、30年代初頭までの日ソ文化交渉は、古き時代（文化に関わる個人の非体系的な交わり）に得られた果実を生かしつつも、その伝統の強度が仇となって、新しき時代（文化をめぐる組織の体系的な政策立案）へと移行できないまま挫折した出来事として位置づけられるのかもしれない。イデオロギーを越えて広がる人脈と言葉を武器としつつも、柔軟かつ継続的な交流のための基盤を確立できぬまま退去の日を迎えたスパルヴィン、そして彼がVOKSから授かった未完の使命は、まさに個人的行為（「文人」的な外交官）から組織的行為（「文化外交」の官僚）へと、「文化外交」なるものの存在形態が——官民を越えた国際文化交流を国家の方へと巻き込むかたちで——変わっていく転換期を象徴していたのである⁵³⁾。

【表 1：スバルヴィン『横眼で見た日本』収録記事とその書誌事項】

| 番号 | 記事の題目 (節の名前) | 初出箇所 | 初出年月 | 内容・備考 |
|----|-----------------|--|-----------------|--|
| 1 | 履歴書にかへて | 「日本とわたし」『文藝春秋』 7巻7号 | 1929年7月 | 元の記事を一部転載。「汎太平洋クラブ」 (1929年4月19日に東京で開催)での講 演内容。 |
| 2 | 東洋学私論 | 「新らしき東洋学に就て」『日 露芸術』(日露芸術協会)7号 | 1926年2月 | 日露芸術協会への寄稿文(露語)の翻訳。 もとは、民間団体「日露芸術協会」でスバ ルヴィンが行った講演会のロシア語原稿。 |
| 3 | 翻訳管見 | (不明) | (不明) | 異なる言語の翻訳のあり方。 |
| 4 | 三十五を顧みて | 「スバルヴィン博士日本語研 究35周年祝賀会」の日本語 答辞(論集にのみ収録) | 1930年10月 | 日露・日ソ間の文化交流のこれまでの進展 と今後の課題について。 |
| 5 | 人の印象 | 「日本の人々を観る」『文学時 代』(新潮社)3巻10号 | 1931年9月 | 元の記事を編集した上で転載。 |
| 6 | 日本の警察 | (不明) | 1930年7月 以降か? | 1929年9月の高萩旅行の際に執筆したも のと思われる。 |
| 7 | 巖谷小波 | 「スバルキン君」木村定次郎 編『小波先生還暦記念』私家 版(非売品) | 1930年12月 | 元の記事を修正・転載。小波の還暦記念論 集で61部の限定出版。スバルヴィンは小 波『にほん・むかしばなし』をロシア語訳 している。 |
| 8 | 二葉亭長谷川辰之助 | (不明) | 1929年10月 | 生前の二葉亭との思い出。 |
| 9 | 和泉良之助 | (不明) | 1931年2月 | 生前の和泉との思い出。 |
| 10 | 銀ブラしながら | 「銀ブラしながら」『婦人公 論』(中央公論社)11巻2号 | 1926年2月 | 銀座の新しい英米文化の流行について(飲 食店・カフェー)。 |
| 11 | 大阪雑感 | (不明) | 1930年6-7月 | 日記の形式で書かれる。 |
| 12 | 平の盆踊 | (不明) | 1929年8月 | 書簡の形式で書かれる。 |
| 13 | 松島の若返り | (不明) | 1929年8月 | 日記・書簡の形式。 |
| 14 | 高萩の夏 | (不明) | 1929年9月 | 書簡の形式で書かれる。 |
| 15 | 無愛嬌な十和田湖 | (不明) | 1929年9月 | 書簡の形式で書かれる。 |
| 16 | 調子の狂つた銚子 | (不明) | 1925年8月 | 書簡の形式で書かれる。 |
| 17 | 勝浦の湯殿 | (不明) | 1925年 | エッセイの形式で書かれる。 |
| 18 | 熱海と伊東の特徴 | (不明) | 1926年9月 | 日記の形式で書かれる。 |
| 19 | 鹽原の幫間 | (不明) | 1928年8月 | エッセイの形式で書かれる。 |
| 20 | 高戸地方の名所 | (不明) | 1927年7-8月 | 書簡の形式で書かれる。 |
| 21 | 変り行く日本 | 「日本とわたし」『文藝春秋』 7巻7号 | 1929年7月 | 元の記事を一部転載した上で、加筆。 |
| 22 | 日本観断章 | (不明) | (不明) | 断片的な手記を集めたもの。田部隆次編 『日本を観る』(青山出版社、1942年)に 再び収録。 |
| 23 | 演劇と映画と音楽 | 「『ソヴェート映画の旅』に就 て」『東京朝日新聞』1931年 6月19日朝刊6面 | 1931年6月 | 袋一平による著書の書評。元の記事から一 部を転載。 |
| 24 | 文学と出版界 | 「日露芸術家の会談記」『新 潮』24巻7号 | 1927年7月 | 座談会での自分の発言のみを編集して一部 転載。 |

| | | | | |
|----|-------------|--------------------------------|-------------|--|
| 25 | 「土の歌」 | (不明) | 1926年9月 | プロレタリア歌人の中村孝助の歌集について。 |
| 26 | 観光座談会にて | (不明) | (不明) | 会話調の文体で書かれる。 |
| 27 | 偶感偶語 | (不明) | (不明) | 断片的な手記。 |
| 28 | エロを解剖する | 「エロを解剖する」『文学時代』(新潮社)3巻9号 | 1931年9月 | 元の記事に多くの伏字が施された上で転載。 |
| 29 | 序にかへて | (不明) | (不明) | 日本語の学習法と、その合理化のための提案(ローマ字化)。 |
| 30 | 永字八法 | (不明) | (不明) | 上に同じ。 |
| 31 | 片仮名 | (不明) | (不明) | 上に同じ。 |
| 32 | 平仮名 | (不明) | (不明) | 上に同じ。 |
| 33 | 漢字 | (不明) | (不明) | 上に同じ。 |
| 34 | ローマ字 | (不明) | (不明) | 上に同じ。 |
| 35 | 日本に於けるロシア文学 | (不明) | 1926年 | 「新しい専門雑誌」の創刊に寄せた講演または文章か? |
| 36 | 『赤い恋』 | (不明) | 1928年1月 | コロンタイの翻訳書の日本での流行について。 |
| 37 | ロシア古典作家について | 「日露芸術家の会談記」『新潮』24巻7号 | 1927年7月 | 座談会での自分の発言を編集して一部転載。 |
| 38 | 距離の短縮 | (不明) | (不明) | 雑誌の創刊文? |
| 39 | 飛行親善 | (不明) | 1927年9月以降か? | 1927年8-9月にソ連空軍の飛行士シェスタコフ(Семен Александрович Шестаков)が敢行したソ連・中国・日本間の親善飛行に寄せた文章。 |
| 40 | 日本の輸入広告展 | 「日本新興絵画広告切抜展覧会」での日本語挨拶(論集のみ収録) | 1929年7月 | 駐日ソ連大使館主催のイベント。スバルヴァインによる日本の新聞スクラップの展示会。 |
| 41 | ロシアの日本熱 | 「日本とわたし」『文藝春秋』7巻7号 | 1929年7月 | 元の記事を一部転載。 |

※以上の表の作成と番号付けは、いずれも本論著者(吉川)による。

※これらの記事は、『横眼で見た日本』内では次のように分類されている。

「私自身」(1-4)

「私以外の人々」(5-9)

「モダン弥次夫婦の日本見物」(10-20)

「横眼で見た日本」(21-28)

「日本語の合理化」(29-34)

「日本文学とロシア文学」(35-37)

「日蘇親善について」(38-41)

【表2：スバルヴィン『横眼で見た日本』未収録の記事とその書誌事項】

| 番号 | ジャンル | 記事の題目 | 出典情報 | 初出年月 | 備考 |
|----|------|-------------------------------------|-------------------------|----------|--|
| 42 | 史料解題 | 山内作左衛門の露語の自筆に就て | 『明治文化』（明治文化研究会）6巻2号 | 1930年2月 | 江戸末期にロシアに留学した幕臣がロシア語で残した史料への短い注釈。 |
| 43 | エッセイ | グリム、アンデルゼン以上の人 | 『童話研究』9巻10号 | 1930年10月 | 巖谷小波の還暦特集号に寄せたもの。 |
| 44 | 論説 | 日本に於ける「トルクシブ」 | 『映画往来』（キネマ旬報社）6巻11号 | 1930年11月 | ソ連映画特集。記録映画「トルクシブ」の日本での上映と反応。 |
| 45 | 紹介文 | チエホフ廿五周年祭 | 朝日新聞社編『趣味の近代層』 | 1930年3月 | チエホフ没後25周年を記念。彼の生涯と作品についての簡潔な解説。 |
| 46 | 論説 | 不作は自然から 飢饉は人間から | 『國産奨励』（國産品奨励実行會）1巻2号 | 1930年7月 | ソ連の五カ年計画と対外貿易の促進について。末尾では（表1:25で扱った）中村孝助の詩を引用。 |
| 47 | 論説 | 正しき産業奨励政策 | 『文明協会ニュース』1931年1月号 | 1931年1月 | すでに掲載された記事（表2:46）を編集・転載（ルビが抜かれている）。 |
| 48 | エッセイ | 「エロを解剖」して | 『読売新聞』1931年9月1日朝刊4面 | 1931年9月 | 記事「エロを解剖する」（表1:28）を出版した後の後日談。 |
| 49 | 談話 | どう変ってゆくか… これからの日本婦人 日本を去るに臨んで | 『東京朝日新聞』1931年11月7日朝刊10面 | 1931年11月 | 家庭欄の「女性相談」コーナーの隣に掲載。 |

※以上の表の作成と番号付け（表1から続いている）は、いずれも本論著者（吉川）による。

謝辞

本論文は京都大学大学院文学研究科スラブ語学スラブ文学専修のゼミ演習での報告（2021年5月27日）ならびに、早稲田大学20世紀メディア研究所第150回研究会（2021年10月30日）での報告を加筆したものである。以上の場合をくださった中村唯史（京都大学教授）・吉田則昭（立教大学講師）両氏ほか、関係各者に篤く御礼申し上げる。また、本研究はJSPS 科研費 JP19J21496 および同・若手研究者海外挑戦プログラム（2022年度）の助成を受けている。

注

- 1) 第三高等学校の学生だった土屋は1929年の京都でのソ連文化ブームを回想している。土屋祝郎『紅萌ゆる－昭和初年の青春－』岩波書店、1978年、95-98頁。
- 2) 近年、戦前期のプロレタリア文化運動に関しては新たな資料の編纂が進んだ。中川成美・村田裕和編『革命芸術プロレタリア文化運動』（森話社、2017年）は、演劇・美術・宗教・メディア・ジェンダーといった多様かつ新たな視角から、文学や党派性にとどまらない総合芸術運動として、プロレタリア文化運動を捉えようとしている。一方、共産主義運動における政治と文化という古典的な問題について、党理論家の蔵原惟人（1902-1991）に焦点を絞って分析した立本絃之『転形期芸術運動の道標－戦後日本共産党の源流としての戦前期プロレタリア文化運動－』（晃洋書房、2020年）も重要である。
- 3) 日露・日ソ関係の人物研究として、中村喜和・長縄光男ほか編『異郷に生きる－来日ロ

- シア人の足跡-』(全6巻)成文社, 2001-2016年や, 長塚英雄編『日露異色の群像30-文化・相互理解に尽くした人々-』東洋書店, 2014年(さらに続・続々・新編の3冊が生活ジャーナル社から2017-2021年に出版)が代表的。特に1920-30年代については, 太田丈太郎『「ロシア・モダニズム」を生きる-日本とロシア, コトバとヒトのネットワーク-』(成文社, 2014年)が日ソ双方の未公刊資料から新たな史実を明らかにした。
- 4) それぞれコップ(Виктор Леонтьевич Копп, 任期:1925年2月-1月), ドヴガレフスキー(Валериан Савельевич Довгалецкий, 任期:27年3月-10月), トロヤノフスキー(Александр Антонович Трояновский, 任期:27年11月-33年1月)である。
- 5) VOKSに関する研究は近年, 世界各国で進んでいる。その戦間期の活動を包括的に扱った近年の代表的なものは次の通り。*Голубев, А.В. "... Взгляд на землю обетованную": из истории советской культурной дипломатии 1920-1930-х годов, Москва, 2004. David-Fox, Michael Showcasing the great experiment: cultural diplomacy and western visitors to the Soviet Union, 1921-1941, New York, 2012.*

本組織のソ連内外での位置づけを, 後者の文献を参考に概説しておこう(なお, 当該書については『情報史研究』第9号(2018年12月)掲載の拙書評を参照のこと)。内戦期のヴォルガ川大飢饉に対する海外からの支援を促し, 人員を受け入れるための機関を前身として1925年に成立したVOKSは当初, 名目上は「非政府組織」の形態をとり, 党国家から一定の自律性をもって活動していた。VOKSは, ヴィリ・ミュンツェンベルク(Willi Münzenberg, 1889-1940)率いるコミンテルン系の宣伝組織「国際労働者救援会 Internationale Arbeiterhilfe (IAH)」と競合関係にあった。両者はともに, 先進的なメディアを用いてソ連内外のヒトや情報の流れの活発化を目指したが, 後者が労働者階級に対してイデオロギー色を前面に打ち出す宣伝を重んじる一方, VOKSは党派性を抑えて広範な対象に訴えかける手法を取った。20年代末からのスターリン体制の確立と, コミンテルンによる階級闘争路線の採用(組織内の党派的同質性を強化する方針)により, VOKSの自律性は制限されていった。30年代半ばの人民戦線戦術, 幅広い階級やイデオロギーをもった海外の人々を味方にする方法の採用後, VOKSの役割は強まるものの, それは党国家の強い統制のもとでのことだった。

- 6) 日ソ文化交渉の舞台裏を知るには, 本来ならばVOKSの駐日支部(スバルヴィン)とモスクワの本部の交渉過程を内部文書から検討せねばならない。主要なものはロシア連邦文書館 Государственный архив Российской Федерации (GARF)のVOKS関係文書の「東方部1924-1937年 Восточный отдел .1924-1937 годы」に所蔵されている(文書番号 P5283 / оп.4)。とりわけスバルヴィンが現場から送った報告書は, 不特定多数に向けた媒体には現れない内容を含んでいる。その厳密な分析を通じてこそ, スバルヴィンが「ソ連文化」をいかなるものとして捉え, それをいかに対外的に示そうと考えていたかという, 本論にとって重要な問題を検討することができる。しかしながら, 2020年春からのCovid-19の全球的な猖獗, 22年2月からの宇露戦争のため, ロシア国内での調査はほぼ不可能となっている(23年4月現在)。そのため本稿は, 主に日本国内で入手可

能な資料に依拠した中間的考察たらざるを得ない。スパルヴィンの「ソ連文化」観や対日宣伝をめぐる思想と実践については今後の課題とする。

- 7) スパルヴィンの小伝的記述は多いが、ここでは以下の記述を参考にした。藤本和貴夫「エヴゲーニー・スパルヴィン (1872-1933) - ウラジオストク東洋学院教授・在東京ソ連邦大使館書記 -」長塚英雄編『日露異色の群像 30 - 文化・相互理解に尽くした人々 -』2014年, 東洋書店, 130-157頁。
- 8) 例えば, 1927年に東京・大阪・名古屋での美術展覧会(新露西亜展)や, 翌年の市川左團次一座によるモスクワ・レニングラードでの歌舞伎公演を挙げることができる。
- 9) 例えば邦語で入手しやすい評伝として以下のものがある。倉田保雄『エリセーエフの生涯 - 日本学の始祖 -』中央公論社, 1977年。加藤百合「ニコライ・コンラド小伝」『比較文學研究』第59巻, 1991年, 85-95頁。加藤九祚『完本 天の蛇 - ニコライ・ネフスキーの生涯 -』河出書房, 2011年。
- 10) *Дубовский, А. С.* (ред.), *Первый профессиональный японовед России: опыт латвийско-российско-японского исследования жизни и деятельности Е. Г. Спальвина, Владивосток, 2007.*
- 11) 藤本和貴夫「エヴゲーニー・スパルヴィン (1872-1933)」, 151頁以下。
- 12) 加藤哲郎が描いてきたソ連への日本人越境者たちが30年代に蒙ったおびただしい悲惨な犠牲は, その最たるものである。例えば, 加藤哲郎『国境を越えるユートピア - 国民国家のエルゴロジー -』平凡社, 2002年。また, ソ連の日本学者たちは対日工作に動員され, 大テロルのなかでスパイ扱いを受け, ネフスキーのように処刑される例も少なかつた。加藤百合『ロシア史の中の日本学』東洋書店, 2008年, 第3章。
- 13) スパルウキン「著者の言葉」『横眼で見た日本』新潮社, 1931年, 6-7頁。本書に序文を寄せた大竹博吉(1890-1958)は, ウラジオストクでスパルヴィンの弟子として学び, ソ連国内で記者を勤め, 帰国後はソ連書籍の輸入業者「ナウカ社」での出版・商業活動を通じて日ソ文化交渉に貢献する。関係者による資料として大竹会編『大竹博吉 - 遺稿と追憶 -』1961年。評伝としては森本良男「大竹博吉とその時代」(全7回)『窓』(ナウカ社)102-108号(1997年9月-99年4月), また彼の日ソ出版交流を扱ったものとして, 吉田則明「出版人・ソ連文化プロモーターとしての大竹博吉の戦後 - 占領期・50年代におけるナウカ社の活動 -」『Intelligence』21号, 97-107頁がある。また本書の編集集中に没した和泉良之助(1871-1931)はウラジオストクの日本人向け新聞『浦潮日報』(1917-31)の創刊者として知られ, 同地でスパルヴィンと交流した。松山邦祐『和泉良之助 - 『浦潮日報』創刊者 -』サンケイ新聞生活情報センター, 1981年。
- 14) 大竹博吉「序」スパルウキン『横眼で見た日本』新潮社, 1931年, 1頁。
- 15) *Дыбовский А. С.* *Образ автора в книге Е. Г. Спальвина «Япония: взгляд со стороны» (Токио, 1931) // Первый профессиональный японовед России: опыт латвийско-российско-японского исследования жизни и деятельности Е. Г. Спальвина / Под ред. А. С. Дубовского, Владивосток, 2007. С.74-99.*

- 16) 藤本和貴夫「エヴゲーニー・スパルヴィン (1872-1933)」, 155 頁以下。
- 17) 彼はその全員と直接の面識があったわけではないが、列挙すれば以下の通り。【陸軍】井染祿朗, 大井成元, 樋口季一郎, 田中義一, 【海軍】川原袈裟太郎, 加藤寛治, 文学: 小西増太郎, 米川正夫, 昇曙夢, 秋田雨雀, 中條百合子, 湯浅芳子, 芥川龍之介, 谷崎潤一郎, 藤森成吉, 武者小路実篤, 土岐善麿, 【音楽】関屋敏子, 山田耕筰, 近衛秀麿, 山本久三郎 (帝国劇場支配人), 【報道・出版】布施勝治, 大竹博吉, 福沢諭吉, 加藤弘之, 徳富蘇峰, 野間清治, 外交: ヴィルヘルム・ゾルフ (駐日ドイツ大使), 出淵勝次, 幣原喜重郎, 川上俊彦 (元駐ポーランド公使・日魯漁業社長), 二瓶兵二・宮川船夫・山口 (不明)・渡邊 (不明) (4人はロシア語を用いる外交官), 【大学関係】桜井錠二, 姉崎正治, 斯波忠三郎, 田中館愛橘, 【警察関係】丸山鶴吉 (警視総監), 【政治家】若槻禮次郎, 伊藤博文, 山縣有朋, 大隈重信, 後藤新平, 森孝三 (後藤の元秘書) 【社会運動家】: 賀川豊彦, 堺利彦
- 18) Prof. E. Spalvin, Japans interest in Russian literature, *Weekly News Bulletin (VOKS)*, No.11-12, 1927, 3/25, p.11.
- 19) 新潮社の円本版『世界文学全集』は第1期 (全38巻, 1927-29年)と第2期 (全19巻, 29-32年)に分けて刊行された。前者では12巻以上がフランス文学に割かれるが、ロシア文学はその次に大きな存在感を示していた。トゥルゲーネフ, ドストエフスキー, トルストイには各1巻ずつ割かれ, チューホフ, ゴーリキー, ゴーゴリの作品は「露西亜三人衆」として編まれている (以上, 21-24巻)。その他, アンドレーエフが「近代戯曲集」(35巻)に収録され, 別の巻にはプーシキン, レールモントフなどの詩も見られる。38巻の「新興文学集」にはエレンブルグやグレブ・アレクセーエフといったソ連作家の作品も収められた。第二期ではアルツイバーシェフ, クプリーン, レオニード・レオーノフが1巻ずつ割かれている。
- 20) スパルヴィンは「最も卓越した日本の文士 litterateurs とロシア語専門家」として, 「米川 Yonekama (正夫)」, 「昇 (曙夢) 教授」, 「蔵原 (惟人) 氏 Mr. Kurahara」と「山内 (封介) 氏 Mr. Yamawutzi」の名を挙げている。山内はウラジーミル・コロレンコの作品を訳した。Prof. E. Spalvin, *Japans interest in Russian literature*, p.11.
- 21) 秋草俊一郎『「世界文学」はつくられるー一八二七ー二〇二〇ー』東京大学出版会, 2020年。同書は「世界文学」の概念と実態について, 主に20世紀の合州国・ソ連・日本の歴史的事例から検証している。戦前期日米での「世界文学」流行は第I部第二章を参照。
- 22) 河盛好蔵『新潮社七十年』新潮社, 1966年, 94-100頁。
- 23) 同上, 53-54頁。日本紙の折本仕立てで, 蒔絵の板表紙をつけて編まれた詩集は, 稀観本となった。Claudel, Paul. *Sainte Geneviève: poème*, Tokio, Chinchiosha, 1923.
- 24) 戦前期の日ソ文化事業に積極的に関与した (例えば芸術展「新露西亜展」への協力) 東京朝日新聞社との関係についても調査が必要である。
- 25) 無記名「汎太クラブ」『讀賣新聞』1929年4月19日朝刊2面。同会は, 太平洋地域の国

- 際交流を企てた「汎太平洋連盟 Pan-Pacific Union」の日本支部「汎太平洋協会 Pan-Pacific Association」傘下の組織。飯森明子「初期汎太平洋同盟 (PPU) と日本の対応 - IPR への日本の原点 -」『アジア太平洋討究』35号 (2019年1月), 30-42頁。
- 26) David-Fox, *Showcasing the great experiment*, p.71-76. VOKS が最も活発に機能したドイツでは、反フランス感情をもつ保守派から、ソ連の社会革命に興味をもつ (必ずしも共産主義者ではない) 左派まで、幅広い層が文化宣伝の対象となった。
- 27) ロシア東洋学の発展については多くの研究があるが、代表的なものとして次を参照。デイヴィッド・シンペルペンニンク=ファン=デル=オイエ (浜由樹子訳) 『ロシアのオリエンタリズム - ロシアのアジア・イメージ, ピョートル大帝から亡命者まで -』成文社, 2013年 (英語原書 2010年)。
- 28) この欧米の日本研究に対する厳しい批判は、初出記事「日本とわたし」【表 1: 1】にはなく、論集にのみ見られる。スバルヴィンに捧げられた追悼文で、彼は小泉八雲と並び称される日本通との評価を受けていたとされているのは皮肉である。無記名「デイクスンとスバルウイン (片々録)」『英語青年』(研究社) 70巻6号 (1933年12月), 197頁。
- 29) スバルヴィンは、独文学者・児童文学者の巖谷小波 (1870-1933) が古くから伝わる御伽噺を翻案して児童文学として結晶させたことをもって日本のグリム兄弟・アンデルセンと評価した上で、にもかかわらず彼の業績が欧米の日本学者に評価されていないと嘆く。なお「東西文明論」については本論の注 42 を参照のこと。
- 30) デイヴィッド・ウルフ (半谷史郎訳) 『ハルビン駅へ - 日露中・交錯するロシア満洲の近代史 -』講談社, 2014年 (英語原書 1999年) の第5章・補論を参照。ロシア東洋学界の歴史について、例えば「ペテルブルク学派」を中心にロシア日本学 японоведение を描いてしまうと、スバルヴィンのような存在が抜け落ちてしまうだろう。加藤百合『ロシア史の中の日本学』東洋書店, 2008年。
- 31) 秋田雨雀 (1883-1962) は日本の文学者・社会運動家。戯曲や児童文学で知られ、エスペラント運動を指導、さらに日露芸術協会の幹部としてロシア・ソ連については素人だったが人脈構築の点で日ソ文化交渉で大きな役割を果たす。1927年、VOKS により十月革命 10周年記念祭に招待されソ連を訪問、帰国後は左翼文化運動に身を投じた。詳しくは、吉川弘晃「秋田雨雀のソヴィエト経験 (1927) - ウクライナ・カフカス旅行における西洋知識人との交流を中心に -」『人文学の正午』9号 (2019年3月), 1-28頁。なお、同時期にソ連に留学し、帰国後に共産主義を礼賛する文学者・中條 (宮本) 百合子とロシア文学者の湯浅芳子も秋田と同じ理由で、スバルヴィンの批判を受けている。
- 32) 村島歸之『歓楽の王宮 - カフエー -』文化生活研究会, 1929年, 41-47頁。
- 33) サトウハチロー「警視總監に与ふる書」『文学時代』3巻4号 (1931年4月)。丸山鶴吉「佐藤八郎君に御返しする書」『文学時代』3巻5号 (1931年5月)。スバルヴィンは同誌で丸山自身は「宴会の時は非常に愉快らしく、大変遊び好きらしい様子でした」「隠れたところでやるのはよいが明るいところではいかぬ、といふ封建時代の心理を自然にあらはしたものでしょう」と「カフェ弾圧」を皮肉る。スバルキン「日本の人々を観

- る」, 32 頁。
- 34) 正宗白鳥「類型藝術」『正宗白鳥全集』第8巻, 1968年, 298-299頁(初出は「文藝時評」のタイトルで連載していたもので『文藝春秋』1931年10月号に収録)。
- 35) スバルキン「著者の言葉」『横眼で見た日本』新潮社, 1931年, 8頁。レイフェルトは日本学者の訓練を受け, 1920年代後半には読売新聞, 31年には東京朝日新聞で風刺漫画を書く。ソ連帰国後は赤軍諜報部に勤務するも, 37年に逮捕され処刑。*Дыбовский А. С. Карикатуры А. А. Лейферта в газете «Токио-Асахи» (1931) // Пути развития востоковедения на Дальнем Востоке России / Под ред. А. С. Дубовского, Владивосток, 2014. С.250-259.*
- 36) レイフェルトの風刺画の出典は, スバルキン『横眼で見た日本』, 3, 139, 321頁。
- 37) スバルヴィンが「外国大使で最も日本を理解した人」として高く評価する(【表1: 5】, 31頁)ドイツの政治家・東洋学者でもあったゾルフ(Wilhelm Heinrich Solf, 1862-1936)は駐日大使(1921-28年)として, 第一次大戦後の日独関係の修復, 特に日独協会での文化交流で大きな役割を果たした。彼は若い頃, サンスクリット語に関する博士論文を執筆し, インドやサモア島を訪れた。Erbar Ralph, „Solf, Wilhelm Heinrich“ in *Neue Deutsche Biographie*, Bd.24, Duncker & Humblot, Berlin 2010, S.549f.
- スバルヴィンの記述によればドイツ語を使えるスバルヴィンも日独協会の催しに参加し, ゾルフを対日文化宣伝のライバルとして意識していたようだ。また, 日本の対独・対ソ文化交流の両方の立役者であったのが後藤新平である。またフランスの駐日「詩人大使」(1921-27年)ポール・クローデルは設置まもない駐日ソ連大使館による政治扇動を警戒していたが, そうした文脈において VOKS による機関紙と思しき「ロシア語と日本語で書かれた政治色のない〈情報誌〉」に興味を示し, これを本国に送付した(1926年3月27日付の外交書簡)。クローデル, ポール(奈良道子訳)『孤独な帝国 日本の一九二〇年代-ポール・クローデル外交書簡一九二一-二七-』草思社, 2018年, 456-458頁。このように, 20年代の東京は各国の文化宣伝に携わる外交官たちの闘技場であった。
- 38) *Каменева О. Д. От редакции // Запад и Восток: сборник всесоюзного общества культурной связи с границей. 1926. книга 1/2, С.7.*
- 39) David-Fox, *Michael Showcasing the great experiment*, p.56-57. カーメネヴァはトロツキーの妹, レフ・カーメネフの妻だが, 彼らとともに27年以降に失脚していく。
- 40) *Ф.А. Ротштейн, О культурности // Запад и Восток. 1926. книга 1/2, С.26-28.*
- 41) *С. Ф. Ольденберг, Восток и Запад // Запад и Восток. 1926. книга 1/2, С.17.*
- 42) 自らが「東西」両文明の架け橋として歴史的役割を果たすという言説は, 楊昌済の東西文明融合論であれ, 京都学派の「世界史の哲学」であれ, 20世紀の非西欧圏では盛んに表出した。そこではしばしば, 「西洋」の物質(量)的優位性に, 「東洋」の精神(質)的優位性が対置されるが, スバルヴィンが示す文明論もその例外ではない。ロシア・ソ連の東洋学者たちの言説の詳細な検討と, 日本や他の地域の知識人の言説との比較によ

って、ソ連の「東西文明調和論」を共時的に位置づけるのは、今後の重要な課題である。

- 43) 座談会の目玉となっていたらう芥川龍之介は遅刻してほぼ発言できず、短い後記を残したのみだ。自作をロシア語に翻訳した信頼できる訳者として言及される「金さん」について、浅野洋は「金子洋文のことか」と注で推測するが（『芥川龍之介全集』第15巻、岩波書店、1997年、328頁）、正しくは朝鮮出身で日本で学び、後にソ連の諜報員・探偵小説家となったロマン・キム（Роман Николаевич Ким, 1899-1967）だろう。彼は VOKS 機関誌『西方と東方』に翻訳「藪の中 В бамбуковой чаще」、論文「現代日本文学について」を寄稿した。P. H. Ким, О современной японской литературе // Запад и Восток. 1926. книга 1/2, С.29-33.
- 44) 各国で膨大な研究があるが、近年の概説的な邦語文献として以下を参照。平松潤奈「ソ連文学」沼野充義ほか編『ロシア文化事典』丸善出版、2019年、348-349頁。中村唯史「ロシア・アヴァンギャルドーその理想と変移ー」松戸清裕ほか編『人間と文化の革新（ロシア革命とソ連の世紀4）』岩波書店、2017年、95-121頁。ミシェル・オクチュリエ（矢野卓訳）『社会主義リアリズム』白水社、2018年、第2・3章。
- 45) 彼女の伝記的記述は次を参照。イリーナ・コジューヴニコワ（三浦みどり訳）『ブブノワさんというひとー日本に住んだロシア人画家ー』群像社、1988年（露語原書1984年、原書増補版2009年）。ただし本書は、日本にいたためにブブノワが置かれざるをえなかったらう20年代後半のソ連本国の方針との微妙な関係については触れていない。
- 46) スバルヴィンは、座談会での自分の発言をまとめ、他の参加者の発言をパラフレーズして、単著記事「ロシア古典作家に就いて」【表1: 24】として改編して論集に収めたことに注意しておこう。
- 47) 無記名「スバルヴィン博士の送別会」『讀賣新聞』1931年10月23日朝刊7面、無記名「展望台・死んだスバルキン」『讀賣新聞』1933年11月12日朝刊4面。
- 48) 秋田雨雀（尾崎宏次編）『秋田雨雀日記』第2巻、未来社、370頁。ソ連大使ユレーネフ（Константин Константинович Юренёв, 1888-1938）の挨拶の後、田中館愛橘、八杉貞利、小野俊一、森孝三の追悼談、さらにスバルヴィンのロシアでの2人の教え子による談話が続いたという。
- 49) 平林たい子「[女の立場から] これも男性の一面かー豪放の陰に潜む性的無関心」『讀賣新聞』1937年11月4日9面。
- 50) 佐々木秀一『日本教育の将来』上巻・下巻、日黒書店、1937年、1322頁。
- 51) 阿部芳治『読書についての断層』私家版、1933年、99頁。
- 52) 近代日本でロシアとの文化交渉を担ったのは、英語やドイツ語、フランス語を学ぶ政府のエリートではなく、そこから外れた文学者や実業家、革命家、宗教家たちであり、彼らこそが国境を越えた精神的網目やロシア文学を愛好する文化的土壌を日本のなかに広く根強く形成した。Konishi, Sho, *Anarchist Modernity: Cooperatism and Japanese-Russian Intellectual Relations in Modern Japan*, Cambridge (Mass) & London, 2013.

- 53) この流れにスパルヴィンとの一瞬の交誼によって抗議したひとつの声が残っている。「芸術と自由」社から歌集『土の歌』（紅玉堂書店、1926年）を出版し、彼に長く詳細な批評を書かせ「その一部を翻訳刊行しようとする程に至」らしめた（【表1: 25】、284頁）「プロレタリア歌人」中村孝助（1901-74）の声である（彼の詩歌の評価については、松永伍一『日本農民詩史』（法政大学出版局、1968年）第6章を参照）。ひとりの農夫はガリ版にこう刻んでいる。

「日本の貧しい農夫の我れよりもスパルキン博士の豊富な日本語
『土の歌』の生まれた村を覚えてて快く語つて呉れた博士だ
『横目で見た日本』の中で土の歌を日本に紹介したスパルキン
土の歌をロシヤの百姓に心から読ませたかつたらうスパルキン博士
共産黨員ではないけれど大使館の書記官公正なスパルキンよ
ロシヤ語にほんやくされた土の歌ロシヤの百姓にいつ唄はれる
日本の共産主義者が土の歌のロシヤ禁止を理論づけるよ
土の歌が煙つたいなら労働者農民の國なんて誇るな
(中略)

日本の共産主義者よ言論の自由と平和があるかロシヤに
啄木の歌に感じた人達に読んで貰ひたい土の歌だよ」

(中村孝助「スパルキン博士」『日本は歌う－歌集－』私家版、1936年、80-81頁)

1930年ごろから日本共産党の文芸理論家・蔵原惟人と日本プロレタリア文化連盟（もとは全日本日本無産者芸術連盟 NAPP）のもとで日本の左翼芸術家たちが集権的に階層づけられていったこと、前衛党の理論と権威を解さない（解せない）者はその場から弾かれていったことが、この千葉の一貧農が抱いた不満とともに刻まれている。また、最大の理解者・スパルヴィンによるロシア語訳原稿は行方不明になったとのことで、自分の詩がソ連国内で発禁になったのではないかと中村は推測している（中村孝助『土の歌－選集－』尚学社、1948年、256-257頁）。

そして、日ソ両国で吹き荒れる弾圧の嵐はこの小さなため息すらかき消していった事実を、本歌集の表紙の真ん中に押された内務省の発禁印は、今なお我々に伝えている（国立国会図書館所蔵、同デジタルコレクションで閲覧可、最終閲覧日：2023年7月14日）。

(第21期第14研究会による成果)